

江戸時代の本づくり―お伽草子から江戸戯作まで

解説資料

開催にあたって

今回の展示では、日本近世(江戸時代)に作られた本の数々を、当時の世相や流行、人々の関心とともに紹介します。

今年の大河ドラマでも、十八世紀後期の出版界を牽引した本屋・蔦屋重三郎が取り上げられ、関連書籍や展覧会なども次々に企画されています。大妻女子大学の文学部日本文学科および短期大学部国文科では、創立の当初から、江戸時代の文学、特に狂歌や戯作に関する資料を蒐集してきました。その中には、蔦屋重三郎とその周辺の人々が関わった出版物も数多く含まれます。趣向をこらした本の数々には、「天明狂歌壇」と呼ばれた文芸サークルの盛り上がり、いきいきと伝えられています。

蔦屋重三郎の手がけた本は、江戸戯作だけでなく、往来物(手習いの教科書)や吉原関連の出版物など、多岐にわたっていました。その背景には、江戸時代に始まった商業出版の大きな広がりがあります。文学だけでなく、実用的な知識や教訓など、暮らしの細部に関わる物事が、本の形で伝えられていました。

江戸時代の出版物には、それ以前の時代に書かれた作品も多く含まれます。『伊勢物語』や『源氏物語』など、中世以前に書かれた文学作品が、印刷されて広く読まれるようになったのは、江戸時代になってからのことでした。過去の歴史や武将に関わる伝承など、歴史的な知識や説話も、本によって伝えられます。

江戸時代の文学は、印刷・出版によって古典や歴史が共有されたことを前提に、翻案やパロディとして花開いた一面もあります。今回の展示では、その一端を紹介し、中世から近世への文化の継承と変奏、本と暮らしの広がりを考えたいと思います。

第一章 中世から近世へ―写本と版本

江戸時代、本づくりは大きな転換期を迎える。中世以前の本は、基本的に全て写本(手で書き写された本)であったのに対し、江戸時代には、印刷・出版の文化が社会に広く浸透する。本を作って売ることを商売とする「本屋」という業態が、江戸時代に初めて登場したのである。

近世の商業出版では、木版印刷(木の板に文字や絵を彫って摺る技法)が主流となった。板木製作には一定のコストがかかるが、増刷によってそれが回収される。幕末にかけて、出版市場は次第に拡大し、読者層も流通網も広がっていくことになる。

木版印刷の普及によって、中世以前に書かれた古典や歴史的な物語、軍記などが、はじめて広く世上に流布した。文学の享受と継承の上でも、印刷・出版の果たした役割は非常に大きい。

一方で、写本の文化も存在し続けた。豪華な装訂の巻物や奈良絵本、高名な書家が揮毫した本など、特製本は写本ならではの存在。また、特別に伝授される秘伝の書付や、個人的な手控え、更には出版が憚られるような時事的な話題など、写本だからこそ書ける内容もあった。写本と版本は、それぞれの特性を活かして棲み分けながら、江戸時代の本の世界を形成していたのである。

1 御伽草子

袋綴横本(以降、特記のない限り袋綴装) 二十三冊

一六・一cm×二三・四cm

箱高さ四五・三cm×幅二六・〇cm×奥行き一九・一cm

享保年間(一七一六～三六) 刊

大坂・渋川清右衛門板

大妻女子大学図書館蔵

大妻女子大学文学部教授小井土守敏

准教授神林尚子

室町時代から江戸初期にかけて作られた短編の物語として巷間に広まっていた幾多の小作品の中から、享保（一七一六～一七三六）の頃、大坂の書店、渋川清右衛門がそのうちの二十三編を集めて「御伽文庫」と名づけて刊行、その作品を「御伽草子」と呼んだ。のちに、こうした作品群の総称として用いられるが、学術的には「中世小説」「室町時代物語」と称すべきとの指摘がある。展示品は、その刊行された二十三編が、販売当時のものと思われる箱に収められたもの。二十三編とは、「文正さうし」「鉢かづき」「小町草紙」「御曹子島渡」「唐糸草子」「木幡狐」「七草草紙」「猿源氏草紙」「物くさ太郎」「さゞれいし」「蛤の草紙」「敦盛」「二十四孝」「梵天国」「のせ猿さうし」「猫のさうし」「浜出草紙」「和泉式部」「一寸法師」「さいき」「浦嶋太郎」「横笛草紙」「酒呑童子」。横長の判型は、当時流布していた、今日奈良絵本と呼ばれる挿絵入りの写本形式を模したものである。

2 酒天童子

列帖装 三帖 二三・四cm×一七・〇cm
寛文・延宝（一六六一～一六八一）頃写
大妻女子大学図書館蔵
縦型奈良絵本。御伽草子。鬼をよそおって財物、婦女子を掠奪した盗賊、酒呑童子の伝説を主題として、源頼光とその四天王による鬼退治を描いたもの。彩色画十二図。上巻冒頭に、「菊亭前大納言伊季卿筆」と書かれた札が貼付されている。「菊亭前大納言伊季」は、今出川伊季（一六六〇～一七〇九）。江戸時代前期から中期の公卿。歌学に通じ、琵琶の名手として知られる。

3 やうじんも

横本 三冊 一六・〇cm×二四・〇cm
江戸前期写
大妻女子大学図書館蔵
横型奈良絵本。御伽草子。王朝物語の『狭衣物語』から、飛鳥井の君の物語だけを取り出して潤色したもの。彩色画一五図。本文は、五類に分けられる系統のうち、無刊記丹緑本や寛文五年（一六六五）版に近いもので、古本の要素も残している。

4 鶴草紙

列帖装 二帖 二三・五cm×一七・五cm
延宝・貞享（一六七三～一六八八）頃写
大妻女子大学図書館蔵
縦型奈良絵本。御伽草子。いわゆる「鶴女房」型と称される異類婚の物語。豪華な装丁から、貴顕・良家の女子の嫁入りに際して誂えられたものと思われる。慈悲心が奇縁をもたらし、比翼連理の契りへと至るところが祝儀にふさわしい。

5 〈参考〉観世音霊験図会

大本 四冊 二五・五cm×一八・〇cm
安政二年（一八五五）刊
京都・勝村次右衛門ほか板
版本…大妻女子大学草稿・テキスト研究所蔵
板木…個人蔵

清水寺の観音霊験譚を絵入りで紹介したもの。清水寺の縁起から、近世（刊行当時）に至るまでの観音霊験譚を収める。色刷りの口絵に始まり、巻三までが霊験譚の集成で、巻四は法華経第八卷第二十五品の観世音菩薩普門品の訓釈になっている。展示した板木は、巻一の七丁と八丁。八丁オモテの十一行目の末尾に、「入れ木」による修正が確認できる。

第二章 商業出版のはじまり

——文学と実用書

近世初期の出版界では、中世以前の作品と、新たに生まれた同時代小説の双方が刊行の対象となった。前者の例では、『伊勢物語』や『源氏物語』などの物語文学や、『徒然草』などの随筆、中世の軍記などが代表的である。日本史上の出来事や人物などに関する逸話を載せた本も世に送られ、通俗史観を形成していく。

一方、新たに同時代小説も登場しはじめる。近世初期の代表的な作者・浅井了意^{あさいりょうい}は、史実や説話に取材した啓蒙書や教訓書、古典を翻案した奇談集など、多数の作品を残した。また、明

暦の大火の顛末を克明に綴った『むさしあぶみ』は、同時代の証言としても注目される。

これに続いて、新たな小説の流れを切り拓いたのは、井原西鶴の『好色一代男』(天和二(一六八二)刊)であった。本作の成功後、この作風に追隨する作品が次々に刊行され、「浮世草子」と呼ばれるジャンルを形成する。浮世草子の盛行は、出版市場の拡大と、出版をめぐる制度の整備をもたらすことにもなった。新風をもたらす同時代小説と、前代に連なる古典は、ともに補い合いながら、江戸の出版市場を広げていくことになる。

本の扱う内容は、文学の領域だけでなく、学問や実用などの諸方面にわたっていた。生活に関わる実用知識も、本の形で刊行され、人々の暮らしに役立てられていく。

(一) 近世初期・中期の文学書

——啓蒙書・通俗史書と当世小説

6 本朝百将伝

特大本 二冊 三〇・六cm×二一・九cm

明暦二年(一六五六) 刊

京・武村三郎兵衛板

大妻女子大学図書館蔵

木版墨摺り。書名の通り、日本の歴代の武将の伝記を、肖像とともに収載。「道臣命」など神話の時代の人物から始まり、中古・中世の武将を年代順に百名掲げて、豊臣秀吉に至る(上文下図、半丁ごとに一名)。刊記の前に、「自道臣命至于豊臣秀吉而既満於百 其間之年数凡二千二百五十余年也」と、本作の趣意が示され、当代に連なる歴史認識を窺わせる。堂々たる大型の書型で、近世初期らしい余裕のある造本。

7 曾我物語(正保三年版)

大本 十二卷十二冊 二七・三cm×一九・九cm

正保三年(一六四六) 刊

京・誓願寺安田十兵衛板

個人蔵

8 曾我物語(寛文三年版)

大本 十二卷十二冊 二七・五cm×一九・二cm

寛文三年(一六六三) 刊

京・井上権之丞、山本長兵衛板

個人蔵

建久四年(一一九三)五月二十八日に起こった曾我兄弟による敵討ち事件を物語化したもの。真名本系と仮名本系の本文が知られ、とくに仮名本系の本文は、近世初期に古活字版が刊行され、間もなく整版としても刊行された。幾度も版が重ねられていることから、江戸期における読み物としての人気がかがわれる。多くの版が挿絵を伴い、正保三版(№7)の古雅な雰囲気の画風は、寛文三版(№8)を機に、菱川師宣風に変わる。寛文三版が一二五図と、絵入版本の隆盛を感じさせるが、以降、版を重ねるにつれて、絵数は減少する。正保版の挿絵は一九一図で最多であるが、すべて丁のオモテとウラそれぞれ半丁の図であり、本文の丁と挿絵の丁とが別(すなわち板木が別)である。寛文版では、「半丁本文・半丁絵」「半丁絵・半丁本文」という二枚連続の板木によって、見開きの絵を可能にしている。

9 本朝女鑑

大本 十二卷六冊 二六・七cm×一七・七cm

寛文元年(一六六一) 刊

京・吉田四郎右衛門板

大妻女子大学図書館蔵

仮名草子。浅井了意作か。木版挿絵あり。「賢明」「仁智」「節義」「貞行」「弁通」の五部から成る人物伝と、女性の心得を説く「女式」で構成。神功皇后や衣通姫などの神代の時代から、紫式部などの王朝の女房たち、『平家物語』『曾我物語』等の軍記に登場する女性など、多様な人物を取り上げる。儒教的人間観を基調としつつ、和歌を交えた行文は文芸的な香気も備える。初版は寛文元年九月の京・西村又左衛門刊本だが、大妻本は比較的早期の後印本に相当。

10 むさしあぶみ

大本 二卷一冊 二六・七cm×一七・七cm

万治四年(一六六一) 刊

京・河野道清板
大妻女子大学図書館蔵

仮名草子。浅井了意作。明暦三年（一六五七）正月に江戸を襲った大火とその後始末を、挿絵とともに綴った見聞記的読み物。出火から江戸諸方への被害の拡大、ようやくの鎮火後と被災者への炊き出し、死者供養のための両国・回向院の建立などを克明に記す。悲惨な災害状況を伝える中にも、滑稽な逸話を織り込んで緊張感をほぐす配慮も。大妻本は初版本に相当するが、後印本も多く、火災時の参考書としての需要もあったと考えられる。

11 日本永代蔵

大坂 卷三のみ存（完本六卷六冊）
二六・六cm×一八・二cm
貞享五年（一六八八）刊
大坂・森田正太郎、京・金屋長兵衛、
江戸・西村梅風軒板
大妻女子大学図書館蔵

浮世草子。井原西鶴著。浮世草子の嚆矢『好色一代男』（天和二年（一七八二）刊）の成功後も、西鶴は旺盛な執筆活動を続け、世上の事件に取材した『好色五人女』などの「好色物」のほか、武家の仇討をめぐる『武道伝来記』、諸国の奇談を集めた『西鶴諸国ばなし』など、新たな題材や表現に挑戦し続けた。『日本永代蔵』は後年の代表作の一つで、よしだはんべえ吉田半兵衛風の挿絵を添え、致富を目指す商人の姿を活写する「町人物」にあたる。

12 西鶴織留

大本 六卷六冊 二五・八cm×一七・九cm
元禄七年（一六九四）刊、正徳二年（一七一一）後印
大坂・岩国屋徳兵衛、大塚屋権兵衛、油屋与兵衛板

西鶴の没後、弟子の北条団水が遺稿を編集して刊行した短編集。西鶴は元禄六年に五十二歳で没したが、死後も遺稿の刊行を望む声が多かったと見られ、『西鶴置土産』（元禄六年刊）、『万の文反古』（同九年刊）の作例もある。本作は第二遺稿集（元禄七年刊）で、団水の手が加えられた部分も多いと推測されるが、内容としては『日本永代蔵』等に連なる町人物で、

商売や家政をめぐる鑑戒、世間智などに関わる短篇を収める。

13 絵本徒然艸

大本 三卷一冊 二五・四cm×一七・八cm
元文五年（一七四〇）刊
京・菊屋喜兵衛板
大妻女子大学図書館蔵

『徒然草』の中から著名な章段を選び、西川祐信の挿絵を添えて刊行した、いわゆる「祐信絵本」の一例。祐信は京都を中心に活動した絵師で、美人画や風俗絵本、着物の図案を集めた雛形本などのほか、『枕草子』や勅撰集などを題材とした絵本を多く手がけた。きめ細かい画風、可憐な美人画と古典文学趣味は、鈴木春信など江戸の絵師にも大きな影響を与えている。祐信絵本の流行には、美麗な挿絵の鑑賞に比重を置く「絵本」という様式への需要も窺える。

（二）実用書の広がり ——「重宝記」のさまざま

14 鍼灸重宝記

横本 一冊 一一・一cm×一五・七cm
享保三年（一七一八）刊、
寛延二年（一七四九）改修後印
江戸・須原屋茂兵衛、大坂・岡田三郎右衛門、
京・勝村治右衛門板
大妻女子大学図書館蔵

本郷正豊著。外題「〈図解／正誤〉鍼灸重宝記綱目全」。書名の通り、鍼や灸の治療法について、図解を添えながら解説した医学書。江戸時代の医学は、基本的に中国から伝来した中医学が主流で、鍼灸治療も広く行われていた。刊記によれば、享保三年（一七一八）の初版の後、誤りを正して再版、更にこのたび、板木の摩耗箇所に入れた修訂第三版として世に送られたものという。板木の修訂を重ね、長く読み継がれたことが窺える。

15 齊民外科重宝記

さいみんげかちようほうき

横本 一冊 七・一cm×一六・四cm

延享三年（一七四六）刊

大坂・岡田三郎右衛門、大坂・毛利田庄太郎板

大妻女子大学図書館蔵

前出の『鍼灸重宝記』（No14）と同じく、横本の書型。掌に広げて一覧するのに適した横本の書型は、医学・薬学書や辞書、人名録など、実用書に多く用いられた。本作は中でも小型の書型で、携帯するための利便性を重視したものか。病氣や怪我の治療法を説く医学書で、脈の取り方や小児への治療法など、幅広い項目を取り上げる。「諸腫瘡之図」の項目では、人体の図解も添えて詳細な解説を付しており、当時の解剖学に関する認識も伝えている。

16 牛科重宝記

横本 一冊 一〇・七cm×一五・九cm

宝暦六年（一七五六）刊

京・丁子屋九郎右衛門板

大妻女子大学図書館蔵

牛の治療法に特化した医書。近世では、牛は田畑の耕作や荷物の運搬などに使役される貴重な労働力であった。本作でも、序文に続けて「耕夫織婦の讃」を載せ、農村の暮らしへの配慮を見せる。本文では、牛の相の見分け方（相牛の法）のほか、脈の取り方、鍼・灸のしかた、諸種の病の治療法や薬の処方などを図入りで解説する。巻末広告には「馬療治重宝記」など関連書目の宣伝も載せられ、この種の書物への需要が読み取れる。

17 婚礼罌栗袋

けしぶくろ

横本 一冊 一三・〇cm×一八・七cm

寛延三年（一七五〇）刊

江戸・西村源六、大坂・柏原屋清右衛門、

京・菊屋七郎兵衛、京・和泉屋伝兵衛板

大妻女子大学図書館蔵

婚礼にまつわる諸種の作法を、図解を交えて解説した礼法書。結納の用意や挨拶の口上、嫁入り道具の準備、祝宴の膳の支度など、一連の礼式が詳細に記され、現代のマナー本に通ずる実用書の性格を備えている。婚礼の作法書には、『嫁娶重宝記』（元禄

一〇年〔一六九七〕刊）などの類例もあり、この種の知識に対する需要を窺わせる。序文は「皇都白水撰集」の署名で、細かい作法を集めたことの比喩で「けし袋」と名付けたことを言う。

第三章 蔦屋重三郎とその時代

——天明戯作の開花

十八世紀後半、江戸の出版界を牽引したのが、稀代の本屋・蔦屋重三郎であった。吉原の出身で、のちに江戸の中心地である日本橋の通油町に店を構えた蔦重は、時代を先取りする斬新な企画を打ち出し、人気作を次々に刊行した。

折しも当時、天明期（一七八一～一八八）の江戸で、武家を中心とした知識人の間に狂歌が流行する。狂歌はいわば和歌のパロディで、和歌の形式を借りつつ、笑いを交えた卑近な内容を詠む戯歌をいう。本来はその場限りの詠み捨てが原則であったが、天明期以来、これを集めて出版する動きが生まれる。

これに目をつけたのが、新進気鋭の本屋、蔦屋重三郎だった。蔦重は、自らも狂歌壇に加わり、才気あふれる狂歌師たちと交流しながら、彼らの遊びを本の形で世に送り始める。美麗な挿絵を添えた狂歌絵本の刊行にも着手し、北尾重政や喜多川歌麿など、当代一流の浮世絵師が腕を揮った。

狂歌壇の面々は、他ジャンルの戯作にも才を発揮した。天明狂歌の中心人物であった大田南畝（四方赤良）は狂詩や狂文でも活躍し、恋川春町や朋誠堂喜三三は、絵入り小説の黄表紙や、遊廓の遊びを描く洒落本でも人気作を執筆。機知の才に富む唐来三和、絵師の顔も持つ才人山東京伝などの人気作者も参入し、戯作界の繁栄をもたらした。

（二）江戸戯作の繁栄

——狂歌・狂詩と黄表紙・洒落本

18 万載狂歌集

まんざいきやうかしゅう

半紙本 二十卷二冊 二二・九cm×一六・二cm

天明三年（一七八三）刊

江戸・須原屋伊八板

大妻女子大学図書館蔵（浜田義一郎文庫）

よものあから おおたなんぼ あけらかんこう
四方赤良（大田南畝）・朱楽菅江編。菅江と四方赤良の序、橘千蔭の跋を付す。南畝が主な選者となった狂歌撰集で、天明狂歌流行の端緒となった画期的な書。書名は勅撰集の一つである『千載和歌集』のもじりで、四季・恋・羈旅などの部立の構成や、装訂なども含めて『千載和歌集』のパロディとなっている。本作の好評を契機として、続編『徳和歌後万載集』（四方赤良編、天明五年刊）などの刊行が相次ぎ、天明狂歌の隆盛をもたらす。

19 〈参考〉千載和歌集

半紙本 二十卷一冊 二二・五cm×一五・四cm

〔正徳（一七一）〜一七六一〕頃刊

京・出雲寺出雲掾板

大妻女子大学草稿・テキスト研究所蔵

藤原俊成撰。平安後期に成立した、第七番目の勅撰集。前出『万載狂歌集』（№18）の参考作として出陳。近世には、和歌の古典として勅撰集が重視され、和歌や狂歌、国学を学ぶ人々の必須教養とされた。判型や造本も含めて諸本が伝存するが、出陳本は、京の書肆・出雲寺出雲掾の板行で、広く読まれた板本の一つ。近世中期に活躍した浮世絵師・奥村政信の挿絵が付されるが、この図様も天明期の江戸戯作に模倣されている（後出№28）。

20 狂歌知足振

小本 一冊 一五・九cm×一一・三cm

天明三年（一七八三）序刊

江戸・本屋清吉（満々堂）板

大妻女子大学図書館蔵（浜田義一郎文庫）
満々堂普栗釣方（本屋清吉）編。酒上不埒（恋川春町の狂名）序。当時の江戸市中の狂歌人をグループ別にまとめた狂歌師名寄せ。南畝を中心とする四方連、朱楽菅江が率いた朱楽連、芝居町の堺丁連（市川團十郎らの歌舞伎関係者が参加）などに並んで、吉原関係者による吉原連の中に、「蕙のから丸」（蕙屋重三郎）「筆の綾丸」（喜多川歌麿）が名を連ねている。大妻本には、狂歌号の下に朱筆

で実名と職業、没年などの書き入れがある。

21 故混馬鹿集（狂言鶯蛙集）

半紙本 二十卷一冊 二二・七cm×一六・〇cm

天明五年（一七八五）刊

江戸・蕙屋重三郎板

朱楽菅江の編による狂歌撰集。朱楽菅江序、四方山人跋。書名は、当初『古今和歌集』のもじりで「古今馬鹿集」と名付けたというが、勅撰集を憚って、本文中の内題は「狂言鶯蛙集」とした（『古今集』の仮名序「花に鳴く鶯、水に鳴く蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」による）。曲節の末、表紙題は「故混馬鹿集」の表記で刊行された。出陳本は、表紙の題簽が破損しているが、「混」の字が判読できる。

22-1 狂歌百鬼夜狂（夷歌百鬼夜狂）

中本 一冊 一八・七cm×一三・〇cm

天明五年（一七八五）序刊

江戸・蕙屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵（浜田義一郎文庫）
蕙屋重三郎の企画による狂歌集。天明五年十月十四日、蕙重の発案で、百物語の狂歌会が開かれた。くじで引いた化物の題で狂歌を順に百首詠み、一首ごと灯心を消す趣向で、催主の蕙重のほか、大田南畝や平秩東作、唐来三和、宿屋飯盛（石川雅望）、山東京伝らが参加。会の顛末をまとめた「百ものかたりの記」（平秩東作）と、席上で詠まれた狂歌を集めたのが本書にあたる。発案から会の主催、成果の刊行まで、蕙重が仕掛け人となった企画として注目される。

22-2 〈参考〉狂歌百鬼夜狂

中本 一冊 一八・〇cm×一二・八cm

天明五年（一七八五）序刊、

文政三年（一八二〇）改修後印

江戸・蕙屋重三郎（二代目）板

大妻女子大学図書館蔵

初代蕙屋重三郎は寛政九年（一七九七）に没するが、その後を継いだ二代目蕙重による板行。板行に際して、宿屋飯盛（石川雅望）が新たに序を寄せる

ほか(「文政二年四月 六樹園飯盛」)、巻末には、二代目の蔦重による跋文を追加(「耕書堂主人 二代目蔦から磨誌」)。その新跋によれば、初板の板木は、文化三年の火災で半分を焼失したが、再板を望む声を受け、不足分を新たに彫って今回の板行に至ったという。

23 通詩選笑知

中本 一冊 一八・二cm×一二・〇cm

天明三年(一七八三) 刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵

大田南畝による狂詩集。和歌のパロディである狂歌と並んで、漢詩を卑俗化した狂詩も当時盛んに行われていた。南畝は、『寝惚先生文集』(明和四年(一七六七)刊)で狂詩の流行に火をつけた先駆者で、本作では『唐詩選』の五言絶句とその注釈書『唐詩選掌故』をもじっている。本作の好評を受けて、『唐詩選』の七言古詩をもじった『通詩選』(天明四年刊)、『通詩選諺解』(天明七年刊)の三部作を世に送り、明治期まで版を重ねた。

24 唐詩選掌故

半紙本 七卷合一冊 二二・二cm×一五・五cm

明和元年(一七六四) 刊

松蘿館蔵板

大妻女子大学図書館蔵(浜田義一郎文庫)

千葉芸閣による『唐詩選』の注釈書。唐詩のアンソロジーである『唐詩選』は、享保九年(一七二四)に荻生徂徠門下の服部南郭が校訂本を刊行したのを契機に、知識人の間で広く読まれ、注釈書も諸種板行されていた。本書では、下段に『唐詩選』の本文を載せ、上欄に語注を掲出して解説を施す。大田南畝の『通詩選笑知』は、この形式を含めて本書を細かく模倣しつつ、学問的な体裁とはかけ離れた卑俗な内容で笑いを誘っている。

25 通神孔釈／三教色

小本 一冊 一五・四cm×一〇・八cm

天明三年(一七八三) 刊

江戸・蔦屋重三郎板
大妻女子大学図書館蔵
唐来三和作、喜多川歌麿画の洒落本。唐来三和・志水燕十序。書名は、空海の『三教指帰』(儒・道・仏の三教を擬人化した思想書)のもじりで、神儒仏の聖人たちの吉原での遊興を描く。江戸の通人として生きる孔子のもとに、天照大神が居候、そこに釈迦如来が訪れて、三人で一路吉原へ繰り出す。本作は唐来三和の戯作として最初の作にあたるが、神儒仏にちなんだ故事や『論語』『史記』等のもじりを巧みに織り交ぜて、遊里の遊びを活写する。

26 曾我糠袋

小本 一冊 一六・〇cm×一二・一cm

天明八年(一七八八) 刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵

洒落本。山東唐洲作、喜多川歌麿画。山東京伝の叙および作者自序あり。作者は京伝の門人で、本作にも京伝作の洒落本『通言総籙』(天明七年刊)の模倣がみられる。本作は『曾我物語』のパロディで、曾我兄弟と朝比奈五郎が吉原で遊興。曾我兄弟の兄・祐成と相方の遊女・虎との逢瀬、虎の朋輩の遊女による曾我五郎時宗への恋慕など、曾我物の枠組に拠りつつも、遊女と客との駆け引きの手管が細かく記され、実在の遊女の噂話も盛り込まれる。

27 猿蟹遠昔噺

中本 二巻一冊 一八・二cm×一二・九cm

天明三年(一七八三) 刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵(浜田義一郎文庫)

黄表紙。恋川春町作・画。書名に「浦島が帰郷／八島の入水」の角書を冠する通り、浦島太郎の後日譚に、壇の浦で敗れた平家一門が海に沈んで平家蟹となる伝説を盛り込み、更に猿蟹合戦と「猿の生き肝」の昔話、道成寺の説話を取り合わせる。昔話の後日譚を仕組む構想は、黄表紙の常套手段でもあるが、本作は当時の江戸での勧化勧進の流行もうがってみせるほか、終盤の道成寺の場では、朋誠堂喜三二や京伝らの戯作者を賑やかに登場させる。

28 百人一首和歌始抄 わかはついでしやう

中本 一冊 一八・八cm×一二・八cm

天明七年(一七八七) 刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵

山東京伝作・画。『百人一首』注釈書のパロディで、歌人の系譜や略伝、和歌の注釈などを載せるが、内容はいづれもこじつけや見立てなどの言葉遊びに終始。たとえば、平安中期の貴族である三条右大臣の先祖に、伝説的な刀工・三条小鍛冶や、歌舞伎役者の三条勘太郎を挙げるなど、細かいうがちに軽妙な笑いをきかせる。口絵の歌仙図も、『千載集』版本(№19) 所載の奥村政信(京伝の画号・政演と同音)の挿絵を模す。

(二) 狂歌絵本の精華

29 夷歌連中双六 えびすうれんちゆうすろく

一舗 六〇・五cm×八五・三cm

天明五年(一七八五) 正月刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵

四方赤良の狂歌連による歳旦狂歌集。さいたんきやうかしゆう 歳旦狂歌集は正月に刊行される縁起物で、毎年黄表紙仕立てや帖装などの工夫が凝らされていたが、本作では正月の景物である道中双六どうちゆうすろくを模す趣向で、新春を寿ぐ気分を湛える。右下を振り出しに、時計回りの廻り双六で、各マス一首の狂歌を挿絵とともに配す。巻頭は山手連の峯松風、中央の巻軸は四方赤良。題名の下に南畝の序、その下に板元の蔦唐丸つたのからまる(蔦重)と画工の筆綾丸ふでのおやまる(歌麿)の狂歌もみえる。

30 絵本八十字治川 やそうじがわ

半紙本 三卷一冊 二二・四cm×一五・八cm

天明六年(一七八六) 正月刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵

北尾重政画。四方山人(大田南畝)序。武者絵を

テーマとした墨摺りの狂歌絵本。蔦屋重三郎は、本作とあわせて、同じく狂歌入りの江戸名所絵本『絵本吾妻扶』(北尾重政画、唐衣橘洲序)・『絵本江戸爵』(喜多川歌麿画、朱楽菅江序)の三点を同時に刊行している。蔦重と歌麿が編者の立場で、画題にちなんだ狂歌を狂歌師に依頼し、絵本として刊行する仕掛けで、『狂歌百鬼夜狂』(№22)等と同様、板元の蔦重主導による企画と言える。

31 古今狂歌袋

大本 一冊 二六・六cm×一八・一cm

天明七年(一七八七) 刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵

宿屋飯盛(石川雅望)編、北尾政演(山東京伝)画。四方山人(大田南畝)序、平秩東作跋。狂歌師の肖像画と各自の狂歌一首を、美麗な彩色摺りで載せた狂歌絵本。前年に刊行された『吾妻曲狂歌文庫』の好評を受け、同様の趣向で収載人数を倍に増やした計百人の構成で、豪華な筥入りの装訂で刊行。序文に続けて、手柄岡持てがらのおかもち(朋誠堂喜三二)や赤良(南畝)らによる五節句にちなんだ戯文を添えるなど、細部まで趣向が凝らされている。

32 潮干のつと

画帖装 一帖 二五・二cm×一九・〇cm

寛政元年(一七八九) 刊

江戸・蔦屋重三郎板

大妻女子大学図書館蔵

喜多川歌麿画。書名は潮干狩りの土産の意で、貝を詠題とした狂歌を集め、歌麿による美麗な彩色摺の絵を添えて刊行。和歌の三十六歌仙にちなんで、三十六人の狂歌師が狂歌を寄せる。巻頭には庶民の女性による潮干狩りの図、続く各丁では貝や海藻などを写實的な筆致で描き、最終丁には武家の奥女中たちの貝合わせの図を配する。雲母摺や空摺などの技巧も駆使され、彫・摺ともに精緻な一冊で、歌麿絵本の傑作の一つに数えられる。

第四章 江戸後期の実用書

——暮らしの中の本

狂歌と戯作の繁栄を寿いだ天明期の後、寛政の改革による出版統制の強化を経て、江戸の文芸はまた新たな方向に舵を切っていくことになるが、以後の展開は別の機会に譲るとして、ここでは先にも触れた実用書の世界に再び目を向けてみたい。出版市場の広がりや経済の発展、学問や技術の進展を背景に、生活に関わる知識を伝える実用書も、質量ともに増えていった。

手習いの教科書として使われた往来物おうらいものは、薦屋重三郎も早くから手がけたジャンルの一つで、近世の識字率の向上に大きな役割を果たした。日常的な手紙文の文例や、地名・人名などの語彙集、『百人一首』などの和歌集や算術書など、多岐にわたる知識が平易に紹介される。

また、各地の名所を挿絵入りで紹介する「名所図会」めいしよずえは、十八世紀後半から盛んに刊行され始め、京都や大坂、江戸などの都市部のほか、街道沿いの名所を取り上げる企画も相次いだ。名所案内や史跡の説明、その土地ゆかりの人物の逸話や和歌なども多数引用され、古典と歴史の受容にも大きく寄与した。

料理書が盛んに刊行されたのも、江戸後期の特色の一つと言える。食材ごとの調理法や、四季の献立の組み方など、様々な企画の料理書が世に送られ、工夫を凝らした食卓の広がりを窺わせる。

33 甲越古状揃

大本 一冊 二五・九cm×一八・一cm
寛政九年（二七九七）刊、嘉永四年（一八五二）後印

江戸・紅英堂（薦屋吉蔵）板

大妻女子大学図書館蔵

往来物のうち「古状揃」と呼ばれる一群は、源義経なのおえかねつぐや直江兼続など、歴史上の人物が書いたとされる手紙文を集めたもので、文例集と歴史教科書、書道の手本を兼ねている。書状（往信・来信）の文例集は、往来物の語源ともなった古典的な形式でもあるが、収載される書状の種類や数、更に判型や装訂も含め

て、各種の伝本がある。出陳本は「倉鼠陳人録」の筆名で、甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信（長尾景虎）の戦に関連する書状を収める。

34 東海道名所図会

大本 六卷六冊 二六・六cm×一八・二cm
寛政九年（二七九七）刊

大坂・河内屋源七郎ほか板

大妻女子大学図書館蔵

あきさとりどう
秋里籬島編。北尾政美、竹原春泉しゅんせんさい斎ほか画。木版

単色墨摺り。東海道の宿駅ごとに、名所や史跡、その土地ゆかりの人物伝や地域伝承などを挿絵入りで紹介。和歌や軍記、通俗史書などの引用も多く載せられ、近世の教養の形成という点でも注目される。秋里離島は、寛政期前後に各地の名所図会を手がけ、このジャンルの代表的な作者として知られる。出陳本には「吉田精一蔵書」の印記あり。刊記には修訂の跡があり、後印本と推定される。

35

世渡名所図会

半紙本 五卷五冊 二二・五cm×一五・八cm

享和二年（一八〇二）刊

京・円屋源八郎ほか板

大妻女子大学図書館蔵

作者・画工不明。木版墨摺りの挿絵を添える。名所図会に擬して渡世の心得を説く作で、「借錢の山」や「一大寺」、高慢を戒める「鼻高山」や「高慢口」など、名所案内の形式で日常的な教訓を記す。寺子屋入りの別称を題にした「初登山」や、読み書きの重要性を説く「文字の掛橋」など、学問奨励の章段も。名所図会のもじりではあるが、戯作というには教訓色が強く、心学しんがく（江戸後期に流行した通俗道徳）の影響下にある作とみられる。

36 〈狂歌／近道〉算法早まなび

中本 一冊 一八・六cm×一三・五cm

享和二年（一八〇二）刊、文化九年（一八一二）後印

江戸・薦屋重三郎（二代目）、

西村源六、西村宗七郎板

大妻女子大学図書館蔵

安定した需要が見込める往来物^{おうらいもの}は、初代蔦重も早い段階から手がけていたが、本作は初代没後の板行で、算法書と商家向けの手紙文例集を兼ねる。刊記は享和二年だが、見返しに「文化九年壬申改正 田村治助編／重田一九補」とあり、文化九年後印本と推される。重田一九^{しげたいくく}（十返舎一九）は、享和・文化期には『道中膝栗毛』等の滑稽本で活躍していたが、見習い時代に蔦重の居候をしていたことがあり、補訂者に名を連ねるのはその縁か。

37 豆腐百珍

縦長本 一冊 二二・五cm×一二・八cm
安永五年（一七七六）刊

江戸・山崎金兵衛、京・西村市郎右衛門、
京・中川藤四郎、大坂・藤屋善七板

大妻女子大学図書館蔵

何必醇^{かひつじゆん}（曾谷学川^{そたにがくせん}）著。

料理書は近世の初期から板行されていたが、特に板行が集中した時期は、三期に分けられる。本作は、元禄期に続く第二期（宝暦・明和期）の掉尾を飾る作で、書名通り豆腐に特化した料理を百種紹介し、「百珍もの」流行の魁となった。唐本に擬した縦長書型で、巻末には中国の古書にみえる豆腐を擬人化した戯文「豆腐子柔伝」や、豆腐に関わる漢詩や本草書^{ほんぞうしょ}の引用を載せるなど、文人らしい考証趣味も備えている。

38 甘諸百珍^{いも}

半紙本 一冊 二二・〇cm×一五・五cm
寛政元年（一七八九）刊、
文化十三年（一八一六）後印

大坂・河内屋直助板

大妻女子大学図書館蔵

珍古楼^{ちんこうろう}主人著。

『豆腐百珍』の成功後、鯛^{はま}や海鰻^{うなぎ}、大根に柚など「百珍もの」の刊行が相次いだ。甘諸^{かんしよ}（薩摩芋）を取り上げた本作では、口絵に「琉球売諸之図」として琉球風の人物画を描き、伝来経路への意識も窺える。「百珍」の書名ながら、実際には百二十三の料理を列挙。巻末に甘諸関連の漢詩や本草書の引用を掲げる点も『豆腐百珍』に倣う。文化九年本の前後にも複数の後印本が行われており、版を重ねて読み継がれたことが窺える。

39 〈江戸／流行〉料理通

中本 四編四冊 十八・四cm×一二・七cm
文政五年（一八二二）〜天保六年（一八三五）刊

江戸・和泉屋市兵衛ほか板

大妻女子大学図書館蔵（浜田義一郎文庫）

八百善^{やおぜん}は浅草の料亭で、江戸の会席料理を確立した名店として知られ、多くの文人墨客に愛された。本作は八百善主人の著で、四季の献立や調理法を載せ、料理本ブームの第三期を代表する作の一つ。初編には名だたる文人の大田南畝と亀田鵬斎が序を寄せ、酒井抱一^{さかいほういつ}や谷文晁^{たにぶんちやう}、鵜形蕙斎^{うがたけい}など一流の絵師が絵を添えるほか、二編以降も渡辺崋山^{わたなべかざん}や葛飾北斎など、錚々たる面々が書画を寄せる。八百善は近代以降も営業を続け、江戸の食文化を伝えている。

40 百人一首むべ山双六

一舗 五二・四cm×七五・四cm
〔江戸後期〕刊

江戸・大黒屋平吉板

大妻女子大学図書館蔵

本版多色摺り。三代歌川豊国画。題名下に「十返舎一九校／歌川豊国画」とある。廻り双六の形式で、右下から中央の「上り」まで、『百人一首』の掲載順に歌仙図と和歌のコマ絵を配置。「むべ山」は文屋康秀^{ふんややすひで}の和歌の一節であるが、当該のコマには、ここに当たった者は「あらし」なので「ほうび（褒美）」を半分もらえとの注記がある。雪・月・花の語を含むコマにも赤で印が付いており、これらのコマが「当たり」扱いだったもののか。

〔解説執筆…小井土守敏・神林尚子〕